

うろこ一枚から緻密に図面に描かれた楼門の屋根にそびえる火除けの鯨(しゃちほこ)、一方で新館の屋根は、楼門との統一感を持たせず、鯨以前に用いられていた鷗尾(しび)が構える。ここにも建物にあったデザインを施す細かさを感じる。

## 遊び心

ところで、辰野博士の真意を突き止めた、と衝動に駆られる大きな仕掛けがある。楼門2階天井板の四隅をくり抜いて施された、4つの干支。近年、同辰野博士の作品である東京駅舎にある8つの干支との関係性が、話題を呼んだのはまだ記憶に新しい。

「実は、本来の計画にあった三門ができれば12カ所の角ができ、十二支を全て当てはめられる。そう考えれ

ば、東京駅に干支を置く必要は無く、武雄のみで干支が完成するはずだったのかもしれないですね。」

と、謎を解く魅力を教えてくれたのは武雄温泉株式会社 岸川日出男(きしかわひでお)さんだ。

意図を言わず残さず建築物で語る、そんな見る人の想像をかき立てる「遊び心」がまた、この建築の大きな魅力なのだ、と気付く。

